

岐阜県内市郡町村史に見られる方言記述

岐阜県における方言研究・記述の歴史 2

A short survey on studies and descriptions of Gifu-dialects in chronicles
published in Gifu Prefecture

山 田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

1. はじめに

前稿、岐阜県における方言研究・記述の歴史」において、明治期から昭和期までに著された岐阜県の方言に関する記述を概観したが、市郡町村史については、大正期と昭和初期のものを挙げたのみであった。市郡町村史は、記述のページ按分もレベルもさまざまでありその地域の方言に関する関心の高さを見られること、また、記述に一定の系譜が観察され岐阜県の方言研究史のひとつの流れが読み取れることなど、岐阜県内の方言研究史を考える上でも重要である。また、県外から岐阜県の方言に関する何らかの情報を得る上でも、市郡町村史を概観することは一定の役割も担う。

本考察は、岐阜県内で刊行された市郡町村史について、方言に関する記述の概略を記した上で、次の観点から観察する。まず、項目の並べ方である。五十音順かその他の分類による順かなどを見ることで、一定の記述方法の継承を捉えていく。さらに、記述者についても着目する。市郡町村史は、当然、当該市郡町村の人間が編纂に当たる。個別の記述も、外部に委託されることもあるが、多くは当該市郡町村の人間が担当する。方言に関心のある人物が各地に見られたかを見ていくことも、地方の方言研究を見ていく際には必要なことである。また、どのような記述内容・方法であるのか、分析もおこなう。さらに、「方言」の扱いについても着目したい。矯正すべき対象としているのか、それとも価値ある遺産と捉えているのか、その意識の広がりを見ていく。その上で、どのような市町村史がこれから求められるのかについて考察してみたい。

本稿では、大正時代以降に各地で編まれた市郡町村史を、旧郡別に、おおよそ北から南へ、また東から西へ見ていく。書名ならびに人名について、旧字旧仮名遣いで記されているものはそのまま旧字旧仮名遣いで記した。書名ならびに人名については、考察中でも同様の扱いをしたが、その他は、明らかに異なる字によって置き換えられている場合も、特に引用する場合を除き、常用漢字の表記に準じて示した。なお、書名に関しては、「～史」「～誌」（古くは「～志」）という表記が見られるが、本考察において記述する際には「～史」を用いることとする。また、収録語彙項目数に関しては、若干の誤差があるかもしれない。おおよその目安として見ていただきたい。おおよそ網羅的に見たつもりであるが、もちろん、すべての市郡町村史を確認できたとは考えていない。方言の記述がない市郡町村史についても、記述がないことを示すために書名を挙げた。その際、複数の巻にわたる場合、民俗編があるものはそれを示したが、全巻の出版年を示したものもある。なお、市郡町村史の編纂者については、岐阜県図書館のデータを参照にし、市町村および役所／役場の類については省略した。地名については、平成の大合併以前の単位を基準にし、それ以前の町村については、合併年と合併後の市町村名を示す。

2. 飛騨地方市郡町村史に見られる方言記述

飛騨地方では、大正時代、吉城郡河合村史（大正4年＝1915年）、大野郡丹生川村史（同年）、吉城郡袖川村史（大正5年＝1916年）、益田郡史（同年）と、多くの方言記述を含む村史・郡史が編まれてきた。共通語との違いを認識しやすい地域であったことが一因であろう。

吉城郡（現 飛騨市、および高山市の一部）

- ・ 『神岡町史 通史編Ⅱ』飛騨市教育委員会編（平成20年＝2008年）
 「第一二章 方言」として、1873項目にもおよぶ、県内最大規模の方言記述を有する。分類は、「東条操著『分類方言辞典』を基本とし一部修正」し、「天地季候」74項目、「鳥・獣・虫・他の類・魚・貝」86項目、「草・木・菌・藻」91項目、「肢体・健康」114項目、「服装・容姿」76項目、「飲食・嗜好」120項目、「住居・座臥」115項目、「老幼・男女」95項目、「社会交通」125項目、「生産・消費」122項目、「行動・性格」291項目、「事物・時・所」124項目、「農山村鉅業」232項目、「習俗・信仰」198項目の記述を含む。神岡町の四季を通じた情景が目に浮かぶがごとき詳しく広範に及ぶ記述もさることながら、多くに用例も付され人の顔の見える記述となっている。また、山之村地区は、「特色を考慮し」207項目が一括して収められている。執筆者は、地元紙『神岡ニュース』で方言のコラムを執筆（1999年10月～2002年11月：全113回）されたこともある甲谷良治氏である。
- ・ 『袖川村誌』袖川村教育会編（大正5年＝1916年）[昭和25年神岡町に編入]
 第五編第二章第九節に「方訛言」として536項目が、五十音順の部（部内は順不同）に、「方訛言」と「備考（＝共通語）」を対照する形で収録される。担当箇所の前書きには「言語は、一般に簡単明瞭なれども、ハをバに、バをハに、ヲをボに、エをベに発音する者あり。此弊老人に多く、中老之に次ぎ、学校教育の受けしものには殆どなし。」とあり、「正しい発音」をするには、教育が重要であると説かれている。編集されたゆえんはともあれ、この時代にこれだけの収録語数をもっていることは重要である。
- ・ 『大正四年 吉城郡河合村誌』河合村教育会編（大正4年＝1915年）
 「第十章 方訛言」に、「名詞に属する部」138項目、「動詞に属する部」44項目、「形容詞に属する部」34項目、「副詞に属する部」10項目が、「方訛言」「正語」「備考」の順に記述されるが、これは、『飛騨國吉城郡方訛言集』（明治36年＝1903年）の抜粋である。各部の提示順は、おおよそ意味分類別である。「鯉魚（＝鯉）」や「ふくろ鳥（＝ふくろう）」に「魚」や「鳥」を「餘分ニ附ス」とあるなど、備考欄の分析が興味深いものもある。
- ・ 『飛騨河合村誌 通史編 全』（平成2年＝1990年）
 「第五編 民俗 第七章 方言のあれこれ」に、回想風の雑記に続き、語彙が載る。方言語彙の挙げ方は独特のもので、基本的に五十音順であるが、「ア」であれば、まず、村独自の方言として21語を挙げたのちに、中・北飛騨共通の方言として短く訳の付された約100語が挙がる。これが、「イ」以下、「ン」まで続く。このような形式のため収録された語彙数は数えきれない。
- ・ 『宮川村誌 通史編 下』（昭和56年＝1981年）
 「第二章 ことば」として、pp.871-948と大部の記述が見られる。内容は、「一 ことばの変遷」、「二 共通語と方言」、「三 方言に及ぼす主な影響」、「四 方言研究の歴史」、「五 ことばの区分」と続いた後、「六 語彙編」、「七『飛州志』及び『飛騨遺乗合府』に見る飛騨方言」となる。「語彙編」には、五十音順にことわざ・成句を含む963項目が記載されるが、「あおがい」などは、生物学的な説明の後に、「昭和五五年一月現在で、村内西忍の河原で発見している。なお明治八年六月坂下村「村地情景明細表」にも青貝のいることが記されている（p.877）」など、村内での観察寸描を載せたり、語源説を載せたりしている。記述方法は、「四 方言研究の歴史」にも言

及されている土田吉左衛門『飛驒のことば』に影響を受けているものと見られる。

また、「『飛州志』及び『飛驒遺乗合府』に見る飛驒方言」には、『飛州志』に見られる109語が、村史編纂時にどれだけ使用されているかを記した調査も載っている。間違いなく、飛驒でもっとも詳細な方言に関する記述の載った市町村史のひとつである。

- 『皇紀二千六百年記念 上竇村誌』（昭和18年＝1943年）
「第四編 生活」に201項目を収録する。前書きによると「村内古老、童幼等に質し、文献を併せて取材せり」とある。ほぼすべての項目に簡単な用例が付されており有用な情報となっている。
- 『上宝村史 下巻 一資料編一』（平成17年＝2005年）
「第二編 民俗編、第三章 文化財」の「附」として、567項目を五十音順に収録する。「横柄な」という意味の添えられる「オチャクイ」や「しょうがない」という意味の「シャナイ」など、長母音を短母音化した語がいくつか見られる点が特徴である。
- 『古川町史』（資料編一：1982年～資料編三：1986年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『国府村史』（昭和34年＝1959年）
「風習編 第四章 方言の今昔」に、『飛州志』に挙がる「飛驒にて民の通称とする言葉」109語から、現在でも用いられる33語を挙げる。

大野郡（現 高山市および白川村）

- 『岐阜縣飛驒國大野郡史 上中下』田中貢太郎編（大正14年＝1925年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『丹生川村誌』丹生川村教育会編（大正4年＝1915）
第二篇第五章に「言語」として291語を、五十音順の部（語頭音以外は順不同）に、「方訛言」と「正語」を比較する形で収録する。前書きに「本村民ノ言語ハ一般ニ粗雑ノ感ナキニ非ズ殊ニ方訛言ハ殆ド郡内共通トモイフベク特殊ノモノハ少キ様ナリ今爰ニ大要ヲアゲン」とある。前書きには教育会副会長角竹喜登、田近慶英、荒川甚三郎の名が見える。また、第六篇には、「各地方言等一般ニ解読シ難キモノハ傍訓ヲ製シ或ハ分注ヲ加フベシ」という岐阜県からの通達事項が載せられており興味深い。1962年版『丹生川村史』によると、角竹喜登氏は、当時「本村尋常高等小学校（個別名称は記されていない）長」であり、後に、『益田郡史』や『郡上郡史』の編纂にも関与されたとのことである。
- 『丹生川村史 全』大野郡丹生川村史編纂委員会編（昭和37年＝1962年）
風習篇の第三章に「方言」の記述が見られ、村の中央部に位置する瓜田を中心とした「方言」が43語、順不同で収録される。多くは植物、家族名など身近な方言である。また、長谷川忠崇著『飛州志』の「飛驒ニ於テ民ノ通称トスル国言」も129語引用されている。こちらも、当時高山市立郷土館長であった角竹喜登が編纂主任となり、40名余の委員によって編まれたものであるが、方言の箇所をだれが執筆したかなどの情報は記されていない。
- 『丹生川村史 民俗編』丹生川村史編集委員会編（平成10年＝1998年）
「第十二章 方言文化」に、「東條操著、分類方言辞典を基本とし一部修正をした」分類として、一 自然現象（210項目）、二 動物（138項目）、三 植物（228項目）、四 人体（380項目）、五 人生・生活（158項目）、六 衣服と容姿（179項目）、七 飲食と嗜好（261項目）、八 住居（179項目）、九 社会と交際（381項目）、九附一 人代名詞（23項目）、九附二 対応詞（20項目）、十 精算消費（202項目）、十一 行動と性情（393項目）、十二 事物・時所（502項目）、十三 農山村（345項目）、十四 習俗と信仰（185項目）を採録。合計3784項目138pp.にも及ぶ記述は、県内でも有数の分量。執筆は、同村在住の岩島周一氏。氏は、『飛驒の方言』（1996：高山市民時報社刊）の著者。

- ・ 『高山市史』(第1巻:1981年~第3巻:1983年)
昭和11年市制施行以来の年ごとの歴史であり、方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『^{ほすえ}上枝村史』上枝村史編纂委員会編(平成12年=2000年)[昭和18年高山市に編入]
「第四章 民俗, 第二節 上枝村時代のくらしとしたり, 六 ふるさとのことば(方言・訛言)」として、五十音順に456項目を採録。「ことば」に「意味」を添える形で書かれており、ほぼすべての項目にわかりやすい用例が付いていることが特徴として挙げられる。なお、本村史は、合併後57年経って刊行されたものである。該当部分の執筆は、澤浦常之助氏とある。
- ・ 『片野町史』片野町史刊行委員会(平成5年=1993年)[明治8年合併し大名田村, 昭和11年高山市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『高山市森下町誌』森下町誌刊行会(昭和61年=1986年)[片野町の一部]
方言に関するまとまった記述は見られないが、「わらべうた」の中に、「かくれんぼ」の歌があり、「かくれんぼするものよっといで もういいかい まんだじやよ(後略)」と指定辞の「じゃ」を用いていることがわかる記述が見られる。
- ・ 『^{おおはちが}大八賀村史 全』大八賀村史編纂委員会(代表 荒川喜一)(昭和46年=1971年)[昭和30年高山市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られないが、「民謡」の中に豊富に方言が見いだせる。同村史については、『飛騨のことば』(昭和34年)に参照した旨書かれている。
- ・ 『荘川村史 下巻』荘川村史編集委員会編(昭和50年=1975年)
「第4篇 民俗, 第七章 伝承, 第一節 ことば・ことわざ」として、「村の構成・族制」46項目、「衣食住・生業」207項目、「人の一生」72項目、「しきたり」9項目、「社交・贈答」35項目、「所作・状態」14項目、「身体・病気」64項目、「いみことば」8項目、「女房ことば」6項目、「ことばづかい」16項目、「挨拶ことば」20項目、計451項目が見られる。意味分類別であり、昭和43年の『宮村史』の記述に似る部分が見られる。
- ・ 『白川村史』大野郡白川村史編纂委員会編(昭和43年=1968年)
「民俗編 第六章 方訛言」に、263語を採録。「ミンチャ」や「ヲヂ」など、発音表記でも現代仮名遣い表記でもない記述方法が散見される。
- ・ 『宮村史』岩井正尾編(昭和43年=1968年)
「第6篇 民俗, 第七章 伝承, 一 ことば・諺」として、解説に続き、「自然」69項目、「動物」87項目、「植物」100項目(下位項目は含まず)、「村の構成・族制」48項目、「生業」65項目、「衣服」55項目、「食物」82項目、「住居」41項目、「誕生・育児」53項目、「子供・若者・老人」23項目、「婚姻」8項目、「葬式・墓」18項目、「しきたり」18項目、「社交・贈答」72項目、「身体」35項目、「所作・状態」81項目を採録。
- ・ 『清見村誌 下巻』清見村誌編集委員会編(昭和51年=1976年)
「第六章 民間伝承, 第五節 ふるさとのことば」に、710語を意味分類によって示す。内容は、「農林作業」106項目、「住居」31項目、「所作状態」363項目、「生誕・婚儀・葬儀」28項目、「幼児語」35項目、「生物」45項目、植物102項目。それぞれ五十音順に示されている。
- ・ 『高根村史』高根村史編集委員会編(昭和59年=1984年)
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『朝日村誌』朝日村誌編纂委員会編(昭和31年=1956年)

1 「大八賀」については、『角川日本地名大辞典21岐阜県』に、「だいはちが」とあるが、高山市の行政情報で確認したところ「おおはちが」であったため、「おおはちが」とする。

「第四篇 生活文化, 第六章 言語 (方訛言)」として, 五十音順 (語頭音以外は順不同) に254項目を収録。章の前書きには, 「村内でも秋神と下朝日では幾分違う言葉もあるが, 方言は概して高山附近と大差ない」と地域差への言及が見られたり, 「方訛言は教育の進歩, 交通の発達等に伴って暫時標準語 (中略) に改められつゝあり, 中には早や老人間でなければ通用しがたいようなものもある」と年代差への言及も見られる。

- 『久々野町史』大野郡久々野町史編纂委員会編 (昭和32年=1957年)
方言に関するまとまった記述は見られない。
なお, 朝日村および高根村については, 昭和25年3月31日までは益田郡に属していた。

益田郡 (現 下呂市)

- 『岐阜県益田郡誌』(大正5年=1916年)
「第三十二章 人情風俗, 第四節 言語」として, いろはの部順に272語を採録する。前書きには交通の不便さから「言語は余り高尚ならず, 方言・訛言の解し難きもの亦多し」とあり, 卑下する姿勢が見られる。広範な領域を記述した郡史であり, 個々の担当者は記されていない。
- 『岐阜県おさか小坂町誌 全』小坂町誌編集委員会編 (昭和40年=1965年)
「第5編 民俗, II 習俗, 4 小坂のことば」に, 五十音順に713項目を収録する。前書きに「今日ほとんど使用されず死語となったものもあるが, でき得る限り広範囲にわたってあつめるようにした」とあり, すでに廢語となったものも含まれている。独特の俚言と思われるものも多く, また, 多くに用例も付されている点は貴重である。成瀬邦男氏による記述である旨, 序に記されている。
- 『萩原町誌』萩原町誌編纂委員会編 (昭和37年=1962年)
「生活文化編 第七章 言語 (方言訛言)」に, 五十音順分類 (ただし, 「ア」などの部の中は順不同) で282語が採録する。「あげる」「うんこ」「よっぽど」など, 共通語と思われる語も幾語か含まれる。
- 『山やまのくち之口村誌』山之口村史編集委員会編 (昭和37年=1962年) [昭和31年萩原町に編入]
山之口村は, 大野郡から益田郡萩原町に編入された村で, 「第一〇節 方言」の箇所にも, 「南北両方の方言が入っており」とか, 「村の古老達が益田人より高山人の方が話しやすいといっている」など, 高山への愛着が記されている。語彙は, 五十音順に353項目が対訳形式で見られる。
- 『下呂町誌 全』下呂町誌編纂委員会編 (昭和29年=1954年)
「第十八章 雑纂, 第一節 生活, 九 下呂町の方言と訛言」に, 五十音順に320項目を採録 (ただし, 語頭音以外は順不同)。訳のほかに注記が十分に取られているものもかなりあり, 興味深い。勧誘表現では「おこまいか」と「おかまいか」両方が用いられているとも記述も貴重である。
- 『飛驒下呂 通史・民俗』下呂町史編集委員会編 (昭和62年=1987年)
「第十二章 村びとの生活と民俗, 第五節 方言」として, 「方言語形」に「共通語訳」を付すという形で, 五十音順に640項目を採録する。当該部分の執筆は, 佐野正隆氏による。
- 『下呂町かみほら上原誌』日下部歳二・上屋悦寿編 (昭和47年=1972年) [昭和30年下呂町に編入]
上原地区は, 旧下呂町から裏木曾街道で加子母から中津川に抜ける道から, 途中で分かれ白川町上佐見方面へと向かう道にある。そのため, 「第4篇 生活文化, 第四章 言語 (方言・訛言)」の初めにあるように, 「萩原・下呂」を中心とした益田言葉とは多少異なり, 竹原の言葉と共にむしろ東濃の言葉に似通う点がある」と, 違いが述べられている。しかし, 次に挙げられる「上原地方の方言・訛言」には, どのようなことばがそのような特徴をもつのかは記されず, 列挙されるだけであることは惜しまれる。語彙は, おそらく『萩原町誌』を参照にしたと考えられ, 五十音順 (各頭音別の部の中は順不同) に語と共通語訳のみを列挙する。採録項目は329。

- 『竹原郷土誌』竹原郷土誌研究会（代表 各務英一）（平成3年＝1991年）[昭和30年下呂町に編入]
「第十部 社会伝承, (十二) 方言」に、五十音順（頭音別以外は順不同）に233項目を採録。
- 『金山町誌』金山町誌編纂委員会編（昭和50年＝1975年）
「第五編 生活を育ててきた民俗, 第十五章 風俗」の中に「方言（ほうげん）・訛（なまり）」として、「方言」に「説明」を加えるという形式で、1017項目を五十音順に採録する。説明においては、「当地域は飛騨・美濃両国の接点でもあり、この地域独特の方言・訛が故郷の匂を現わし、懐かしさを表している。」と、方言に対する郷愁を表現している。また、一部に文法的な表現を含む慣用表現を別に記すが、その基準が明確でない点が惜しまれる。

土田吉左衛門『飛騨のことば』（昭和34年）によると、ほかに、同年頃、高山町、丹生川村、灘村、上枝村、大八賀村、荘川村、久々野村、袖川村にて町村史が編纂中で、その草稿を参考資料として得た旨書かれているが、この中で県内図書館で得られたのは、わずかに『丹生川村誌』（大正4年）、『袖川村誌』（大正5年）、『大八賀村史』（昭和46年）のみである。今回探し得なかった資料については、いずれ探し得た際に報告したい。

3. 東濃地方市郡町村史に見られる方言記述

東濃地方は、県内でも教育熱心な地域として名を馳せているが、市郡町村史には、意外と方言の記述が多くない。特に、旧土岐郡地域は、市町史に方言の記述が見られないが、これは、この地域が方言に関心のない地域であることを必ずしも表すものではない。なぜならば、多治見市については、教育研究所が昭和になってから2度にわたって方言集を編んでいるからである。特に東濃は、このような方言集の編纂が盛んである。詳しくは、前稿参照のこと。

恵那郡（現 恵那市および中津川市）

- 『恵那郡史』恵那郡教育会（大正15年＝1926年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『「恵那地域誌」＝続恵那郡史』中津川・恵那広域行政事務組合編（昭和63年＝1988年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『加子母村誌』加子母村誌編纂委員会（昭和47年＝1972年）
「第四章 生活と民俗, 第一一節 口頭伝承, 四 言葉」として、記述が見られる。概説には、「なも」を用いることなど「名古屋言葉の影響」、アクセント型、ガ行鼻濁音がないことなどが記されており、記述の質が高い。続く語彙については、「方言」と「共通語」とを対照する形で、274項目について採録する。例文は51項目にのみ付けられているが、たとえば「おじぎをする」という意味の「ハム」には、「先生に出会ッたら ハマニャダチカンゾ」とあり、接続や禁止の表現などについての情報も得られる。
- 『付知町史通史編・資料編』（昭和49年＝1974年）『続付知町史』（平成17年＝2005年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『福岡町史』（資料編：1980年～通史編下巻：1992年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『川上村史 通史編・資料編』川上村史編集委員会編（昭和58年＝1983年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『坂下町史』坂下町史編纂委員会編（昭和38年＝1963年）
方言に関するまとまった記述は見られない。

- 『坂下小史』坂下小史編集委員会編（平成3年=1991年）
「4方言」として、付知町小南守郎氏による東西方言境界を示した方言分布図に続き、五十音順に、192項目について「方言」と「共通語・意味」を記す。あとがきには、「ここに記載した方言は、鎌田宮雄先生の「付知の方言」という小冊子を参考にしてまとめたもので、詳しく分類したものではない」とある。付知と坂下は隣接するが、方言差の有無については何も記述がなく、これを坂下の方言としてよいかは別に論じる必要もあろうが、なんとか方言の記述を含めたかったという気持ちは感じ取れる。
- 『坂下町史 平成16年版』岐阜県恵那郡坂下町町史編纂委員会編（平成17年=2005年）
独立した「第一章 方言」として、五十音順（語頭音以外はおおまかな五十音順）に、611語を採録する。「使われていた方言を整理するというより、まず量としてできるだけ多く行別に集めてみた」とあるように、特別な意図をもって集められたものではないが、述語に続く助動詞が広範に収集されており興味深い表現が多く見られる。编者・担当者などは記述されていない。
- 『蛭川村史』蛭川村史編纂委員会編（昭和49年=1974年）
「五 言語・俗信（一）方言」に、「この村の方言」という概説に続き、「名詞」110項目、「動詞・助動詞」159項目を、五十音順に「方言」に「正しい言葉」を対照する形で採録する。「ぐてし（湿地）」「けんた（六尺丸太）」「もろんど（吐松）」など珍しい語を多く採取する。「動詞・助動詞」については、終止形のみではなく、「いわせる（いいなさる）」のような敬語、「いこまいか（行きましょうか）」のような勧誘形、「おけ（やめなさい）」のような命令形、「おくら（やめるだろう）」のような推量形、「くれにず^マ（あげましょう）」のような意向形なども挙げられている。また、「ちゃっちゃんと」や「せんぐり」のような副詞もいくつか見られ、「かかりと（厄介になっている人）」や「つらはらし（無愛想者）」のような独特な名詞も含まれている。
- 『中津川市史』（通史上巻：1968年～下巻近代2：2006年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『手賀野の歴史』手賀野の歴史刊行委員会・土井裕夫編（平成元年=1989年）[明治30年中津町（昭和27年に中津川市）に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。ただし、「一年のくらし」などは、聞き書きが方言でなされており、大きな価値をもつ。この中には確認要求の「ね」に相当する終助詞が「ない」となっているなど、音声がないと誤解もなされやすい表現も多く含まれている。
- 『恵那市史』（資料編：1976年～通史編第3巻：1993年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『岩村町史』岩村町史刊行委員会（昭和36年=1961年）
「三三 岩村町の方言」に、「ダ」を使うこと、鼻濁音を使わないことなどの特徴を記した上で、「単語表」に、1091項目について五十音順で単語、品詞、意味を記す。各項目には、「この地方に特に用いられる、珍しいもの」と「亡びそうな傾向のもの」に印を付している。品詞は、『岐阜県方言集成』に倣っているのか、「句」とした連語が多く見られるが、「句」は助動詞や補助動詞がついた表現である場合もある。また、「あげる」を「名詞」とするなど、厳密な分類ではないところも見られる。とはいえ、1091項目にも上る採録数は東濃の市町村史の中では最多であり、資料的価値は高い。
- 『山岡町史』山岡町史編纂委員会編（文化財図録編：1977年～通史編：1984年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『明智町誌補遺編』（昭和50年=1975年）
「8 方言」と独立した章にて、「概観」に続き「語彙例集」と「話しことばの一例」（談話）を載せる。概観では、隣接する山岡町などと異なり、明智町の大部分では三河的な終助詞「のん」

を用い、一部に尾張的な「なも」を用いることなどが記されているほか、「標準語と異なる音韻現象」として、サ行四段活用のイ音便、二重母音のアイがアーと伸びる現象、「なりた」「つくりた」「死にた」などの非音便現象などが挙げられている。

「語彙例集」には、共通語訳が添えられた五十音順の俚言190項目にすべて用例が添えられており、語彙以外にも重要な情報を提供してくれている。文法項目も多く採取されており、それらは、代表的な動詞に添えられるのではなく当該の意味を表す部分が的確に切り取られている。さらに、「話しことばの一例」として挙げられている独話も資料的価値が高い。

このように、本方言記述は、方言研究者のひとつの理想とも言える形を、限られたスペースの中に示しているが、それもそのはず、執筆者は、当時金城学院大学の助教授であった本名信行氏である。

- ・ 『三郷村史』村史編纂委員会（委員長石田弥三郎）編（昭和18年＝1943年）[昭和29年合併し恵那市となる]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『串原村誌』（昭和43年＝1968年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『上矢作町史 民俗編』上矢作町史編纂委員会編（平成20年＝2008年）
「第七章 方言・口頭伝承、第一節 方言」に「一 概説」「二 音声・アクセント」「三 文法」「四 語彙」と20ページにわたり詳述されている。全編、田島優（現 宮城学院女子大教授）の執筆であり専門的な内容となっている。文法は、動詞の活用、形容詞の活用、助動詞（尊敬、アスペクト、可能、否定、断定、過去、様態・伝聞、推量、意志、打消、勧誘）、接続助詞（同時並行、原因理由、順接、逆接）、終助詞に分類されているが、推量のラとダラーの違いなども詳述されている。語彙は、東西方言差の中で見る特徴を記述したのち、町内外のことばの差を一部地図を含めて示しており、東濃南部の詳しい地図として随一のものとなっている。その他の語彙は、名詞、形容詞・形容動詞、動詞、副詞・応答詞、表現に分かれ、さらに名詞は動物、植物、衣食住、空間・時間・場所、農作業・民俗、遊戯、人に分類。総計229語が採録されている。
- ・ 『かみむら』「かみむら」編纂委員会編（昭和38年＝1963年）[昭和31年上矢作町に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『河合郷土史 全』岐阜県恵那郡笠置村河合^{かさぎ} 河合青年支会編（大正4年＝1915年）[旧加茂郡：明治30年笠置村、昭和29年合併して恵那市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『落合郷土誌 岐阜県中津川市』落合郷土誌編纂委員会編（昭和45年＝1970年）[昭和31年中津川市に編入]
「第二〇章 生活と民俗、第四節 落合の方言」に、「単語の部」として五十音順に用言を中心に75項目と、「語法の部」として、受身、使役、尊敬、時、指定、否定、推量、希望、比況の助動詞、ならびに、「助詞の部」として、副助詞、格助詞、接続助詞、終助詞、間投助詞について記述する。「時の助動詞」については、「完了態」や「進行態」のように「態」を用いている。一方、「は」や文末に付く「わい」を格助詞とするなど、分析の不十分さが見られる。
- ・ 『笠置村誌 全』笠置村教育会編（昭和13年＝1938年）[昭和29年合併して恵那市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『武並町史』武並町史編纂委員会編（平成5年＝1993年）[昭和29年合併して恵那市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『山口村誌 下巻 近・現代 民俗』山口村誌編纂委員会編（平成7年＝1995年）[平成17年越前県合併により長野県木曾郡より中津川市に編入]

「第六章 民俗、第十二節 ふるさとのことば」に、五十音順に458項目を収録する。「ヤットカメ（久し振り）」のような東海地方で聞かれる語が見られる反面、過去推量の「ヤツツラ」など長野・静岡的な語も見られるなど、県境の町ならではの特徴が見られる。

土岐郡（現 多治見市、土岐市、瑞浪市）

- ・ 『瑞浪市史』（資料編1972-歴史編1974）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『陶町史』圓洲居士（永井圓次郎）著（昭和9年＝1934年）[昭和29年合併して瑞浪市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『土岐市史』（1970-1974）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『土岐津町誌 下』土岐津町史編纂委員会編（平成9年＝1997年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『岐阜県土岐郡妻木町史』日東泉之進編（大正11年＝1922年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『郷土駄知』岐阜県土岐市立駄知小学校 郷土史研究会編（昭和34年＝1959年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『ふるさと泉 自治人物編』『ふるさと泉 産業文化編』ふるさと泉編集委員会編（平成元年＝1989年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『鶴里町誌第三卷（通史編）下 山なみ遙か歴史の道 中馬の里』鶴里町誌編纂委員会編（平成21年＝2009年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『下石町誌 ろくろの里』下石町誌編纂委員会編（昭和59年＝1984年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。[昭和30年合併して土岐市]
- ・ 『肥田町史』肥田町史編纂委員会編（平成8年＝1996年）[昭和30年合併して土岐市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『多治見市史』（資料編：1976年～通史編：1987年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『かさはらの歴史 笠原町史その五』笠原町史編纂委員会編（平成5年＝1993年）
方言に関するまとまった記述は見られない。

4. 岐阜・中濃地方市郡町村史に見られる方言記述

中濃地方で特記すべきは、加茂郡白川町および東白川村である。県内でもっとも早く方言の記述をおこない、その後も、県内でもっとも収録語彙数の多い方言集が編まれている。また、現郡上市にも記述レベルの高い町村史が多く見られる。いずれも、方言記述に関し伝統のある地域と言えよう。

郡上市（現 郡上市）

- ・ 『郡上市史』郡上市地方改良協会（大正15年＝1926年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- ・ 『高鷲村史』山川新輔（昭和35年＝1960年）

「第三章 方言と訛言」に、五十音順に、方言形にかっこで簡単な共通語訳を付けて、五十音順に334項目を示す。末に「高鷲村中学校調査」とある。

- 『白鳥町史 通史編 下巻』白鳥町教育委員会編（昭和52年＝1977年）

「第九章 民俗, 第三節 方言」に、解説につづき、858項目（幼児語19語を含む）を五十音順に採録する。方言の定義は「他の地方ではあまり聞かれないようなことば」としているが、共通語が拾われているということはない。本記述の特徴は、長良川系の語彙と九頭竜川系の語彙とを併記している点である。九頭竜川系というのは石徹白地域である。石徹白は、昭和33年に福井県から岐阜県に越権合併をした地域であるが、その合併に至るまでに岐阜・福井両県知事や国会議員まで巻き込み混乱があった。それに配慮したものと考えられる。また、「幼児語」や特徴ある音韻現象、接頭辞・終助詞についての記述があったり、会話例が載せられていたりで、興味深い。
- 『大和町史』（1984年～2004年）

方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『明宝村史 通史編 下巻』金子貞二編（平成5年＝1993年）

「第三部 民俗, 第一章 方言」に、対訳形式で五十音順に1414語を採録する。「ヨチバル（よろめく）」など、郡内他の地域で採録されない語も収録する。金子氏は、明方中学校の校長を勤めた後、村立博物館館長として長く勤め、『奥美濃よもやま話』全5巻を編纂された。どちらも、明宝地域の方言資料として貴重な記述である。
- 『郡上八幡町史 下巻』大田成和編（昭和36年＝1961年）

「6 八幡のことば」として、概説に続き、音訛、語法、語彙を載せる。概説には、近隣地域との関係を主にした記述に続き、特徴的な語についての説明が見られる。特に、関西と同じ「オーキニ」が「比較的新し」く、以前は「ヨーヨ」が用いられていたとの記述は興味深い。他にも単語を列挙するだけではわからない特徴がよく記されている。また、音訛は、郡上高等学校方言研究会編（1952）『郡上方言 第一集 語彙編』のものを参考に、独自の例を拾ってある。語法についても、おおよそ『郡上方言』の抜粋に、近年の変化を加えてある。たとえば、勧誘は『郡上方言』に「イカマイカ」のみが載っているが、この町史には「『いか』が近年は『いこ』となり『いこまいか』と変わってきた。」と変化が示されている。他の助動詞・補助動詞表現についても、少し詳しく観察が加えられている。また、『郡上方言』には拾われていなかった接続助詞が列挙されている。特に、係り結びに由来する逆接の「こされ」は、例文こそ同じであるが、「『ござれ』とにごる場合もあって、市街地ではそうっている」との貴重な記述も見られる。語彙は、「諸文献にしたがって解説を試みた」とあり、独自のものであるとの記述があるとおりに、『郡上方言』に載らないものや、『郡上方言』よりも地域ごとの変異形を多く213項目について記述する。『郡上方言』を補完する貴重な記述である。おおよそ五十音順であるが、「ワリゴ」の後、最後に「流木作業に携わる人夫」という意味の「カリコ」が詳しく解説されている。最後に「この項では特に、郡上方言・岐阜県方言集成・飛騨のことば・全国方言辞典を参照にした」とある。
- 『村誌 郡上郡 西和良村』（大正4年＝1915年）[昭和29年合併し八幡町]

方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『和良村史』（1988年～2002年）

方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『美並村史 通史編 下巻』美並村教育委員会編（昭和59年＝1984年）

「第三編 民俗編, 第一章 美並村の民俗, 第九節 方言」に、五十音順に方言1074項目を採録する。語彙の記述は簡便で用例も挙げられていないが、ところどころに、音韻、形態論、文法現象に関するコラムが見られる。コラムの分析は、たとえば「『あらずも』あるだろう」や「『さわらスカ』さわらない」について、「言葉の下につけて語を強める」と述べるだけで、物足りない

ところもあるが、このような特徴的な語を項目として挙げていることは評価できる。最後には、「道ばたで出合った老婆二人の会話」も収録する。また、第八節には、山の民「サンカ」の風俗が記されており、サンカ独特のことばも採録される。

加茂郡（現 美濃加茂市および加茂郡）

- 『美濃国加茂郡誌』（大正10年3月＝1921年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『白川町誌』白川町誌編纂委員会編（昭和43年＝1968年）
「第三編 生活と文化、第六章 民俗、第六節 方言」に、「方言（ほうげん）訛（なまり）」と銘打ち、「方言」と「正しい言葉」の対照という形式で、五十音順に148項目を挙げる。「蛇」を「へんび」、「南天」を「なるてん」など、音が変わっただけの語形から、「めそめそ（日の暮れ方）」のような珍しい語の報告まで、多様にある。
- 『白川町誌 現代編』白川町誌編纂委員会編（平成17年＝2005年）
方言に関するまとまった記述は見られないが、白川町内の方言差、方言に関する調査・記述などについて簡単な記述は見られる（pp.712-713）。また、白川町で平成10年から15年までおこなわれた方言による創作物語など方言保存事業についても記述が見られる。
- 『西白川村誌』（大正13年＝1924年）[昭和28年町制施行により白川町]
「第八章 風俗習慣、第一節 風俗」の24に「方言」として「方言」と「正言」を比較する形で五十音順に746項目を挙げる。白川町の図書館には、ほぼ同一内容の同書の原稿（同年）も残っている。
- 『加茂郡黒川村誌』（明治45年＝1912年）[昭和31年白川町に編入]
県内で見当たる限りもっとも古い、方言の記述のある村史である。「第四章 風俗、十 方言」として「方言」と「正言（解）」を対照する形で、順不同に25項目を挙げる。
- 『黒川村誌』馬場義見他編（昭和12年＝1937年）[昭和31年白川町に編入]
「第二章 人文、第十二節 風俗習慣、四 言語（方言・訛言）」に、「正しい言葉」と「方言・訛言」を対照する形で、鳥の種類からはじまり、おおよそ意味分類別に279項目を挙げる。「ぜも」や「けも」など旧恵那郡につながる終助詞が見られるほか、否定の「へん」は、五段動詞の未然形ではなく「行けへん」のように仮定形に続いていることが記されているなど、貴重な記述が見られる。
- 『東白川村誌』荻田乙三郎・佐伯吉六他編（大正3年＝1914年）
「第五章 風俗宗教、第一節 風俗」の「十」に方言の記述が見られる。提示順は語頭音のみ五十音順で、457項目が挙げられる。「ひず（元気）」「ほーたがひ（案外）」など、重要語の収録も見られるほか、勧誘表現の「まいか」は、「おかまいか」「かかまいか」などのように、ア段に続くことも特徴的である。
- 『新修東白川村誌 通史編』東白川村誌編纂委員会編（昭和57年＝1982年）
「第四部 郷土の民俗、第三章 口頭伝承、第四節 ことば、一 方言・訛り」として、意識、音声、文法形式等の概説に続き、「方言・訛り」に、「共通語・意味」と「使用例・説明」を付す形で、五十音順に513項目を挙げる。半数ほどの語形に、その使用例が付されていることで、記述自体が、非常に有益な記述となっている。執筆担当者は、第四部全編、安江又右衛門氏とある。
- 『七宗町史』七宗町教育委員会編（1986年～1993年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『八百津町史』八百津町史編纂委員会編（昭和57年＝1982年）
「第四編 民俗史料、第一〇章 方言」に、八百津の本町のことばとして、「方言」に「正しい言

葉」を対応させる形で、イロハ順（頭音以外は順不同）に751項目を挙げる。音の特徴については、連母音「アイ」「オイ」が東濃東部のように「アー」「オー」となることなど、中濃地域で特徴ある音韻現象が記されている。

- 『和知村誌』岐阜県加茂郡和知尋常高等小学校編（昭和11年＝1936年）[昭和30年八百津町に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『川辺町史』川辺町史編さん室編（平成8年＝1996年）
「第二章 風俗・伝承, 第六節 方言」に、五十音順に163語を採録, 簡便な訳を記す。林真一・井戸喜男両氏の調査からの転載も含まれるとある。井戸氏は、自身でも『ふるさとの方言集～美濃・中濃地方編』という方言集を平成20年に刊行している。
- 『下麻生町誌』安藤宣保著（昭和60年＝1985年）[昭和31年七宗町・川辺町に分町合併]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『美濃加茂市史 民俗編』（昭和53年＝1978年）
「第一〇章 方言」に、「第一節 方言」に概説として、方言矯正の歴史を振り返りつつ方言の価値について述べたのち、「第二節 語法・音韻・アクセント」にアクセント, 連母音の融合と, 活用, 否定辞の形態, 形容詞連用形のウ音便, 敬語などを概説する。特に、敬語については、「雨がフラッセル」など天候にも用いる旨, 重要な指摘を含む。また、特徴的な語彙についても意味別に概説する。「第三節 語彙」にも、第二節に続き、「自然」「動物」「植物」「人体」の意味分類別に、文章で特徴的な語を挙げていく（リストではないため語数は不明）。
あとがきに、方言の項目の執筆担当が佐野一彦氏とある。佐野氏は、柳田国男の門下生として著書をもつ民俗学者であると記されている。
- 『坂祝町史』坂祝町教育委員会町史編纂事務局編（2002年～2005年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『富加町史』富加町史編集委員会編（1975年～1980年）
方言に関するまとまった記述は見られない。

可児郡（可児町は1982年可児市となる。兼山町は2005年可児市に編入）

- 『御嵩町史 民俗編』（昭和60年＝1985年）
「第十一章 御嵩の方言」として、64pp.におよぶ詳細な記述を含む。五十音順に約400語について、「方言（含・なまり）」に用例, 「共通語などの表記」, ならびに解説を付す。語数こそ少ないが、そこに付された説明は、県内郡市町村史中でもっとも詳しいもののひとつ。語源説についても示されている。
『御嵩町史』によると、著者は、同町在住の佐賀松彦氏である²。
- 『伏見町誌』伏見町誌編纂委員会編（昭和31年＝1956年）[昭和30年合併し御嵩町]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『兼山町史』兼山町史編纂委員会（昭和47年＝1972年）
「第一八章 民俗, 第五節 方言」として、単文例に加え、語彙を「方言」と「標準語」の対照という形で、五十音順に228項目を挙げる。中には「おっちょこちょい」「どてら」「てんこもり」

² この『御嵩町史』とほぼ同一（最後の数項目が異なる）の記述が、『菊沢季生国語学論集 第五巻』に見られる。『菊沢季生国語学論集 第五巻』には、「この項の文責」として佐賀松彦氏の名前が見られる一方、『御嵩町史』の「序」には「方言の編集にあたりご指導賜りました」として菊沢氏の名前が見られることから、ここでは、著者を佐賀氏と捉えておく。

など、必ずしも方言とは言えない項目も含むが、一方で、「かたくろ（かた隅）」「くつづる（熱中する）」など、県内で記述の少ない語の採録も見られる。

- 『可児町史 通史編』（昭和55年＝1980年）
第八章に「方言」として、会話例、「音声的变化」、「語法の特徴」に加えて、語彙335項目を五十音順に挙げる。会話には、「足がだるうし（足がつかれて）」と、東濃西部の多治見市などで見られる連母音の長母音化現象がわずかに見られ、「音声的变化」の「連母音の長音化」にも、「あかい」が「あかあ」などになることが記されているが、語彙には、この特徴は入れられていないなど、一貫していないところも見られる。
- 『可児市史 第四巻 民俗編』（平成19年＝2007年）
方言に関するまとまった記述は見られないが、魚名や食生活などに方言が併記されることもある。

武儀郡（現 関市・美濃市）

- 『岐阜県武儀郡上之保村誌』土屋禮一著（昭和13年＝1938年）
「第一八章 第四節 方言・訛言」に五十音順（ただし、語頭音以外は順不同）に、586語を収録する。武儀郡東部に位置する上之保村の特徴として、金山町的な東部と津保谷を中心とする西部とで、言語差が見られることが記されている。語彙は、「いのちきーパイ（カーパイ）」や「ほうたがひ（呆然となしなすことを知らぬこと）」など、貴重な俚言が多く含まれている。
- 『上之保村誌』（昭和51年＝1976年）
「第二編 地誌編、第一五章 風俗・習慣など、第四節 方言・なまり」に、簡単な概説に続き、方言を共通語と対照する形で、五十音順（語頭音以外は順不同）で551項目を採録。「甘柿」の意味の「みょうたん」や「羨し欲しがる」との訳が当てられる「うせましがる」など、特有の語もいくつか見られる。
- 『上之保村史誌』（平成12年＝2000年）
上記『上之保村誌』との重複を避ける意図があったため、方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『岐阜県武儀郡 富野保村誌 全』中村泰輔編（大正14年＝1925年）[昭和30年合併し武儀村、昭和46年町制施行]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『武儀町史』武儀町教育委員会編（平成4年＝1992年）
「通史編、第9章 現代、四 方言と訛り」に、概説に続き、方言を共通語と対照する形で、五十音順（ただし、語頭音のみ。第二音以降は順不同）で388項目を採録する。
- 『美濃市史』（通史編上：1979年～通史編下：1980年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『関市史』関市教育委員会編（昭和42年＝1967年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『新修 関市史 民俗編』関市教育委員会編（平成8年＝1996年）
「第三章 文化と民俗、第三節 方言」に、概説、語彙集、方言地図、「文字化資料（＝談話資料）」を収める。語彙集は、「方言」「共通語」「用例」を、五十音順に753項目収録しており、「鷺見玄次郎氏（関市出身で、現在は岐阜市長森に在住）が、長年にわたって収集されてきたものを活用させていただき、一語一語について、用例をあげた」とある。鷺見玄次郎氏は、平成9年（＝1997年）に『岐阜県の関の方言集』を私家版として刊行しており、それと対比すると、おおよそ『岐阜県の関の方言集』の抜粋がこの『関市史』の方言記述と言えそうであるが、連母音について、

『岐阜県の関の方言集』では「ナー」「コォー」となっているのに対し、『関市史』では「ネー」「コェー」となっているなど、違いが見られる。また、例文も若干の違いはあるが、両者基本的に共通した場面の用例を載せている。『岐阜県の関の方言集』には、平成2年の第二稿にて、「例話文」も添えた旨書かれていることから、『関市史』が実質、鷺見氏の未定稿に拠ったことは明らかであろう。方言地図については、関市内の22地点でおこなわれた調査に基づくもので、50枚が採録されている。地域的な偏りが見られない分布も多く、年齢や場面差なども気になるところであるが、その点についての記述が見られないのは残念である。

- 『板取村史』渡辺賢雄編（昭和57年＝1982年）
方言に関するまとまった記述は見られないが、田植えや草刈りなどの作業歌の中に「たわけ」「なげにゃよい（なければいい）」などのことばが見られる。
- 『洞戸村誌』古田廣一編（大正14年＝1925年）
「第八章 風俗、第三節 方言訛言」に、いろは順に361語を収録する。前書きには、「言語は余り高尚ならざれども近時教育の普及と交通の頻繁とにより漸次矯正せられつつあり」とあり、方言矯正が本項目執筆の一要因であったことを伺わせる。県内できわめて早期に編纂された村史中の記述であるが、収録語彙数も多く、また、持続を表す「ちよる」や「なんじゃ（何です）」のうならかす（無くする）」のような文法形式にも言及があるなど、貴重な記述も少なくない。
- 『洞戸村史 上巻』洞戸村史編集委員会編（昭和63年＝1988年）
「民俗編、第五章 生業と方言」に、「第一節 職人ことば」と「第二節 方言（一般）」の二節を割く。「職人ことば」のほうは、紙漉きに関する語60語、「筏師ことば」20語、「炭焼き言葉」46語、「川漁言葉」87語、「猟師言葉」39語、「百姓ことば」47語、「日傭言葉」134語、「かいこ飼言葉（養蚕）」46語、「鋤夫言葉」18語を、それぞれ五十音順で採録する。県内でも、このような業種別の専門用語を含む関連語の分類は珍しい。「方言（一般）」には、「病気に關しての方言」21語を含む372項目がおおよそ五十音順（一部入れ替わりあり）で採録されており、方言、対応する共通語に多く用例が付く。
- 『武芸川町史』武芸川町史編纂委員会編（昭和54年＝1979年）
「第一九章 民俗、第五節 方言」に、「方言の特色」に続き、「方言」と「標準語」を対照する形で、五十音順に223項目を採録。
- 『新修 武芸川町史』新修武芸川町史編纂委員会編（平成17年＝2005年）
「第一九章 民俗、第五節 方言」に、「方言」と「標準語」を対照する形で、一般的な語を五十音順に253語収録する。
- 『富野村誌』後藤守著（大正12年＝1923年）[昭和29年関市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『^{かぶち}神淵村八十年史』岐阜県武儀郡神淵村年史編纂委員会（昭和30年＝1955年）[昭和30年加茂郡七宗町町に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。（「神淵村」とも）

山県郡（現 山県市、一部は岐阜市と合併）

- 『山縣郡志』山縣郡教育會（大正7年＝1918年）
同書のpp.340-351というわずか12pp.であるが、五十音順に387語を収録。特に、可能を表す副詞「イゴト」や、他の記述にはあまり見られない狭い分布を呈する「オサ（畝）」（ただし、『恵那市史地名編』に「長島（オサシマ）」が同義のオサからきている旨記述あり）、限定の副助詞の用法をもつ「ガ 例 五錢ガオクレ」のような貴重な記述を含む。
- 『美山町史 通史編』（昭和50年＝1975年）

「第六章 生活と民俗, 第八節 方言」に, 名詞, 代名詞, 形容詞, 動詞, 副詞, 接続詞, 「其他」と, 品詞ごとに292項目を採録する。名詞については, さらに, 「天文地理に関する名称」, 「博物に関する名称」, 「人倫に関する名称」, 「身体に関する名称」, 「衣食住に関する名称」, 「神仏人事に関する名称」, 「農工商に関する名称」, 「雑」と, 意味別に分類され, 対訳を付す。「追う」「止める」「転す」が, 動詞ではなく「其他」に分類される点, 形容動詞を欠く点など品詞ごとの分類の難点もかいま見える反面, 意味ごとにことばが掴みやすくなっている。最後に慣用表現の文例と人称に関する若干の覚え書きを含む。

- 『高富町史 通史編』(昭和55年=1980年)
「第四編 民俗, 第一〇章 信仰・伝承・芸能」に, 「三, 命名」ならびに「四, 日常生活用語」として, 「自然現象」「土地」「個人」「人体」「人の特徴」「動物」ならびに「呼びかけ用語と返辞」「挨拶用語」「呪文」「かけ声」として, 特徴的な語ならびに表現が20行見られる。夕方の挨拶「おっしょうございます」など珍しいあいさつ表現も見られる。
- 『伊自良村誌』伊自良村教育委員会(昭和48年=1973年)
「伊自良の昔ばなし」を含め, 方言に関するまとまった記述は見られない。

本巣郡(現 本巣市, 瑞穂市, 北方町)

- 『本巣郡志』本巣郡教育会(大正12年=1923年)
第六篇 民俗篇に, 「方言について」ならびに「方言」として62pp.を収める。「地方夫自身より, 語そのものよりいへは, 自然の経路をふみつゝ, 大に独自の發達をなしつゝ, 今日にいたれるものなりといふに, 何等の躊躇をなすものに非ず。されはこの意義よりすれば, たゞに方言なりとの故をもつて, 或はこれを矯正せんとし, 或はこれを排斥せんとするか如きは, 實に言語の發達を無視し, 阻礙し, 或は言語の保護を, 忘却したるもの, とはさるへからず。(同:311)」と方言擁護の立場を取りつつも, 古語を「正しかりし詞」とみなしていることも見逃せない。方言語彙は, 五十音順に語や句を語源を添えて638語を収録する。当地で「馬鹿」のことを「たわけ」ということから「あぜ」を同意に当てるなど貴重な証言も含んでいる。
- 『根尾村史 通史編』(昭和55年=1980年)
「第四編 民俗, 第七節 方言」に, 五十音順で224項目について「方言」「遣いわけの例」「意味」を記す。「遣いわけの例」とは例文のこと(一部に別の言い方が記される場合もある)で, 「意味」は, この「遣いわけの例」に対して付く形になっている。しかし, この「遣いわけの例」があることで非常に豊富な情報が得られている。また, 村北部では, 「越前方言の要素も含まれ」岐阜とアクセントが逆になっていることも記されている。
- 『本巣町史 通史編』(昭和50年=1975年)
「第一〇章 民俗, 第九節 民俗知識」の「二, 方言」に, 「方言」と「語意」を対照した形で, 五十音順に853項目を挙げる。
- 『山添村志』高井忠一郎著(昭和5年=1930年)[昭和25年合併し本巣村, 同35年町制施行]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『真正町史 通史編』(昭和50年=1975年)
「第一六章 口頭伝承・民俗知識」に「四, 方言」として, 「標準語」との対照で五十音順に504項目を採録する。
- 『真桑^{まくわ}村志 第四卷』真桑尋常小学校編(昭和8年=1933年)[昭和30年合併し真正町]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『土貴野^{とぎの}村誌』土貴野尋常小学校編(昭和2年=1927年)[昭和30年合併し糸貫村, 同35年町制施行]

方言に関するまとまった記述は見られない。

- 『改訂 北方町史』(昭和7年=1932年)
「第四編 特殊方面, 第十一章 当地方に使用さるゝ方言」に, 「方言」と「標準語意義用例」とを対照する形で五十音順(語頭音以外は順不同)で302項目を収録。「行きませうか」に対応する形として「いこまいか」と「いかまいか」が併記され, 「来ない」に対応する形として「きやせん」「こえせん」「こいせん(「ていせん」とあるが, これは「こいせん」の誤植であろう)」が見られるなど, 岐阜市周辺の文法形式の変化を見る上でも興味深い記述が見られる。なお, 大正4年に元版が出版されているが, そこには方言に関する記述は見られない。
- 『北方町史 通史編』(昭和57年=1982年)
「第九章 社会生活と伝承, 第六節 方言」として, 「大正一年(1912)に本巣郡小学校長会が集めたものと, 林清一が昭和三八年(1963)七七歳でまとめたものを載せ」てある。同町の文化審議委員であった林氏は, 『思い出すまま』という著作を昭和42年に私家版で刊行しているが, その前身ガリ版刷りのものが当該書である。語彙は, 300項目を五十音順に, 「方言」と「標準語意義用例」を対照して挙げる。接続助詞の「と」に相当する「さいが」の「と」を介在させない例や「ほうたがい」のような岐阜市周辺の狭い範囲の方言についての貴重な記述が見られる。また, 語彙について「北方町の俗語」として「アカン, アカン」や「おナベ様(仏飯をたく鉄ナベ)」など, 特徴ある表現について, 語源を含め随筆風に52項目載せている。補遺16項目がある。
- 『穂積町史 通史編下』穂積町史編纂委員会編(昭和54年=1979年)
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『本田村誌』(大正13年=1924年)[昭和29年合併し穂積町]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『巣南町史』巣南町史編集委員会編(昭和53年=1978年)
方言に関するまとまった記述は見られない。

岐阜市

- 『美濃国稲葉郡志』(大正4年=1915年)
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『岐阜市史』(昭和3年=1928年)
「第十五章 風俗, 第一節 方言」に, 品詞別に137項目を収録する(名詞66項目, 動詞27項目, 副詞13項目, 形容詞10項目, 「雑」21項目)。特に, 「雑」には, 「いりゃあ」や「かしてちょう」など, 名古屋方言からの流入と思われる文末表現が多く拾われている反面, 「おかせ」など, 現代では廃れてしまった表現も少なからず見られる。項目数としては少ないが, 岐阜市の貴重な記述となっている。
- 『岐阜市史 通史編 民俗』(昭和52年=1977年)
方言的要素が入った遊び歌はあるものの, 方言についてまとまった記述は見られない。
- 『常磐村誌』常盤村誌編纂委員会(昭和18年=1943年)[昭和15年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『網代村志』高橋岩雄編(昭和17年=1942年)[昭和38年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『岐阜市黒野史誌』黒野史誌編集委員会編(昭和62年=1987年)[昭和25年岐阜市に編入]
「第一八章 民話・歌謡」に, 地名の由来と並んで「ドチ(土用の頃に売られた大きな餡の付いた餅)」に関する記述があり, また, 「歌」にも「ほったろ(蛭)」「たわけ(バカ)」などの方言要素が拾われているが, まとまった記述は見られない。

- 『岐阜市鷺山史誌』鷺山史誌編集委員会編（昭和63年＝1988年）[昭和10年岐阜市に編入]
「第一章 鷺山の民俗，第七節 郷土の方言」として、五十音順に555項目について「方言」と「共通語」とを並べて示す。はじめに「必ずしも郷土のみで通用するものだけに限っていない」と断つてあるとおり、県内他所にても用いられる語も多く見られる。「網デッキ（焼網）」などは飛騨や東濃の方言と認識されがちであるが、岐阜市における貴重な証言となっている。また、現在では「よもぎ餅」を指すことの多い「ぶんたこ」も収録されており、「柏餅の一種」とあることなども貴重な記述である。岐阜市周辺のみで通用する「ほうたがい」も「困惑する」とある。
- 『芥見郷土誌』芥見郷土史編纂委員会編（昭和36年＝1961年）[昭和33年岐阜市に編入]
「第一四編 郷土の言語」として、「第一章 郷土の方言の特徴」「第二章 関西弁の特徴」「第三章 関東弁の特徴」「第四章 品のある郷土言葉」「第五章 郷土地方の方言」と分析が続いた後、752項目を採録する方言集を載せる。動詞に続く諸表現については、最後に「語尾」として、「見る」という動詞に付された形を載せる。「見いーず・見やーず（見よう）」など、現在では聞かれなくなった表現が見られる一方、「見られいへん」のように、ら抜きでない否定の「ヘン」を用いた形が載せられていることなども貴重である。五段動詞についての記述があるとなおよいであろう。語にはアクセントも記されているが、記された語は多くない。「第四章 品のある郷土言葉」には、関西風の表現と関東的な表現が混じる中、関西風の「あほかいな」のような卑罵表現であっても上品としている点が興味深い。
- 『岐阜市 則武史誌』則武史誌編集委員会編（平成2年＝1990年）[昭和15年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『島郷土史』島郷土史編纂委員会編（昭和53年＝1978年）[昭和9年岐阜市に編入]
「7. 文化風俗」として、おおまかな意味別に163語を採録する。特徴的なのは、「標準語」を先に挙げ「方言」を対応させる方法で示されていることである。少ない記述の中にも、継続の「～ちよる」、勧誘の「～(o)まいか」、依頼の「～てちょう」、命令の「～んさい」などが、適当な動詞と共に示されている。
- 『岐阜市合渡の歴史』（昭和61年＝1976年）[昭和34年岐阜市に編入]
「第一五章 民俗，第七節 方言」に、「ふるさとの方言」として、老年層婦人の会話例に続いて、「方言・訛語」と「通用語」を対照する形で、150項目を採録する。記述は、安藤忠雄氏。安藤氏は、巻末に「有識者」として名前が挙がる人物で本書の編集委員の筆頭にも名前が挙げられている。続いて、「ワッチとオマハン ー 曾我屋弁のこと」として、音韻、文法等の特徴を解説する。こちらは、坂口幸雄氏の執筆。坂口氏に関する詳細は、記述が見られない。
- 『加納町史 上／下』加納町史編纂所編（昭和29年＝1954年）[昭和15年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『本荘村史』岐阜県稲葉郡本荘村役場（昭和6年＝1931年）[昭和6年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『厚見村史』厚見村史編集委員会編（昭和35年＝1960年）[昭和30年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『厚見郷土史』厚見郷土史編集委員会編（昭和62年＝1987年）[昭和30年岐阜市に編入]
「第四章 生活の民俗，第九節 口頭伝承」に、831項目が五十音順に「方言」と「語意」とが配置される。「ゆうとさいが（行きますと）」「おいちょくんさい（置いてください）」など、文法項目はやはり適当な動詞に付されて表されているが、特に、「いけせん 又は いかへん」「とっとく 又は、とっちょく」「みんさい 又は、みやあ」のように、興味深い揺れが示されている。
- 『日置江の歴史』川並秀賢著（平成18年＝2006年）[昭和33年岐阜市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。

各務原市

- 『各務原市史 考古・民俗編 民俗』各務原市教育委員会編（昭和60年＝1985年）
「第四章 文化と民俗，第四節 方言と言いまわし」に，母音融合や特徴的な形式について，性差とあわせて記述し，語彙を五十音順に252語採録する。「なも（親しみや念おしの気分）」「かの（疑問）」「エカ（念を押し）などの終助詞に加え，「……してくんさい（希望）」「……シンサル・……ッセル（尊敬）」「マイカ（勧誘）」「シタルニ（何かをしてあげるとき）」「カス（あまりほめた行動でないとき）」「ゲナ（伝聞）」「チョル（状態）」「とさいが（サイガは強めの文句）」などの語尾が載る。
- 『各務村史』白木林一編（昭和38年＝1968年）[昭和30年合併し鷺沼町，同38年に各務原市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『那加町史』小林義徳著（昭和39年＝1964年）[昭和38年合併し各務原市]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『蘇原の歴史』小林義徳著（昭和59年＝1984年）[昭和38年合併し各務原市]
方言に関するまとまった記述は見られない。

羽島郡（川島町は平成16年各務原市に編入，柳津町は平成20年岐阜市に編入）

- 『川島町史 通史編』（昭和57年＝1982年）
「第四編 民俗，第一章 風俗・習慣，第五節 方言」に，「方言」に「語彙，語の原形」を付す形で，1956語項目を採録する。提示は五十音順で，文法的な形式は，「行く」や「やる」などの動詞と組み合わせられて示される。
前書きにあるとおり，「川島地方の純粋な方言ではない」ものも，「あいにく」「あっさり」など多数散見されるが，これらの語も合わせて川島町で使われている語彙の総体がよりよく知れるものとなっている。中には，「いぎす（陸稲）」「おだまぐつ（無口者）」「しゃちがく（世話やく，おせっかいやく）」「ほうたがい（当てはずれ）」など，他の地域ではあまり採取例がない貴重な語も多く採取されており採録者の意欲が強くにじみ出ている。
- 『岐南町史 通史編』（昭和59年＝1984年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『笠松町史』笠松町史編纂委員会編（昭和32年＝1957年）
「第六編 雑纂，第二章 民俗，第八節 笠松地方の方言」として，五十音順に797項目を，「方言」と「標準語又は意義」を対照する形で示す。文法項目も適当な動詞に付いた形で示されており，継続の「～よる」，推量の「～じゃろう」，尊敬語の「～んさる」「～やあす」，否定の「～せん」，勧誘「～(o)まいか」など主立ったものが見られる。
- 『柳津町史 柳津編』『柳津町史 佐波編』（昭和47年＝1972年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『羽島市史 第三巻』羽島市史編纂委員会編（昭和46年＝1971年）
近代史と民俗関係の記述を含むが，その中に方言に関するまとまった記述は見られない。ただし，「子どもの遊びの様々」に収められた「じょんじょん隠し」には，「『じょり』『草履』の方言『はよ』は『早く』の方言」など，注が付く。ただし，「隠した」を「隠いた」とサ行イ音便で言うことについては，方言との注は見られない。
- 『江吉良郷土史全』小池実・瀬古喜三郎著（昭和33年＝1958年）[昭和29年合併し羽島市]
「第十七 付録篇，第五章 郷土地方の方言と訛」として，アクセントの概説に続き，「方言」と「正言」の対応形式で，イロハ順に29項目を挙げる。小池・瀬古両氏は「著作代表」とあり，その前に「岐阜県羽島市江吉良町江吉良公民館長」とある。

笠松町史・川島町史ともに、関東・関西の両特徴を併せ持つことを、この地の方言の特徴として描いている。「い」と「へ」の音の区別が完全ではないことなど共通した部分もあり、参照関係にあったことが見て取れる。

5. 西濃地方市郡町村史に見られる方言記述

西濃地方は、意味分類別あるいは品詞別の記述が多く見られ、いくつかの流れによって記述がおこなわれていったことがわかる。特に、南濃町と養老町は、記述内容に類似点が多く、同じ執筆によるものであることが伺われる。

大垣市

- 『大垣市史 中巻』(昭和5年=1930年)
「第十一編 風俗志, 第五章 大垣方言」に、「大垣方言」と「東京語」を対照する形で、品詞別に、名詞376項目、動詞149項目、形容詞及副詞119項目、「助動詞, 接続詞, 助詞其他」17項目の、合計561項目を収録する。前書きとして、「我が大垣固有の言語を集め、是を録して子孫に傳うるは、言語學の歴史を研究するに必要な事業なりとす」とあり、言語事実の記述の必要性に気づいているが、反面「方言訛言の調査と其の矯正はまた國語教育上緊要の事に属す」とあるなど、やはり方言撲滅が目的であることも記されている。また、『郷里方言集』という会誌(杉崎・植川(2002:357)によると、大垣青年会による同会誌のことで、明治35年から36年までの三回にわたって方言の記述があり、約800語が品詞別に収録されているとのことである)をもとに、増補改訂を加えて本記述が整えられたことも記されている。
- 『大垣市史 民俗編』(平成20年=2008年)
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『赤坂町史』赤坂町史編纂委員会編(昭和28年=1953年)[昭和42年大垣市に編入]
「第九篇 民俗, 第六章 赤坂の方言」に、「ちゃ言葉」の解説に続き、五十音順で、方言語彙548語を収録する。
- 『大垣市史青墓編』(昭和52年=1977年)[昭和29年赤坂町に編入, 昭和42年大垣市に編入]
「第一三編 民俗, 第九章 方言」に、方言による「対話例」が3ページ半と、品詞別に分類された「方言用語」113項目を採録する。訳は簡便なもので用例はない。杉崎・植川(2002:359)によると、著者に伊藤茂樹氏の名が見える。
- 『外濶町史』細川道夫著(平成12年=2000年)[昭和22年大垣市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。

揖斐郡(谷汲村, 揖斐川町, 坂内村, 春日村, 久瀬村, 藤橋村は、平成17年合併し揖斐川町)

- 『揖斐郡志』揖斐郡教育会編(大正13年=1924年)
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『谷汲村史』(昭和52年=1977年)
方言に関するまとまった記述は見られないが、「童唄」に「ねんねにねちょくれ」とあったり、「朝のつとめはつろうござるよ」などとあったりで、方言は豊富に採取される。
- 『池田町史 通史編』(昭和53年=1978年)
「第五部 民俗, 第七章 伝説・伝承, 第八章 方言」に、「池田町と方言」という概説に続き、「～さ」「～し」「～ちゃ」のような名前の後に付く「敬称」, 「代名詞」, 特徴的な動詞語彙をいくつか集めた「動詞の方言」等の分類で特徴を記述する。ただし、「形容詞」には、形容詞だけでなく、副詞や強意の接頭辞「ど～」, さらに「やっとかめ」のような挨拶表現や「あかん」等

の禁止表現も含まれる。語彙は、「池田地方の方言一覧表」として、「方言」と「標準語」を対照し、五十音順に318項目を採録する。

- 『揖斐川町史 通史編』(昭和46年=1971年)
「第九章 民俗, 第八節 伝説・昔話・方言・俗信, 三 方言」に、「日常生活用語」170項目を、「方言」と「共通語」との対比の形で、五十音順に示す。
- 『野村村誌』(昭和34年=1959年)[明治22年揖斐町, 昭和30年揖斐川町に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『岐阜縣揖斐郡大和村誌』富田幸一編(大正13年=1924年)[昭和30年合併し揖斐川町]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『大野町史 通史編』(昭和60年=1985年)
「第四章 近代・現代 第七節 民俗」の中に、飲食、住居、人事等に関する常套句に続き、天地・気候56語、身体・健康100語、服装・容姿48語、飲食・嗜好51語、住居・座臥40語、人事・老若男女56語、社会・交通(交際・習慣)39語、生産・消費(遊び)43語、行動・性情295語、観念的表現26語、事物・場所80語、農山村76語、習俗・信仰18語、幼児語33語、婦人語22語、ていねい語8語、卑語・罵倒語64語と、語義分類による方言1055語が「方言」と「共通語」を比較する形で記載されている。
- 『西郡村志』西郡村志刊行会(大野町西小学校内)(昭和32年=1957年)[昭和29年合併し大野町]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『春日村史 下巻』春日村史編集委員会編(昭和58年=1983年)
「第七章 民俗, 第十二節 方言」において、語彙を、下ヶ流、川合・中山、寺本の三地区の比較で示す。分類は、名詞、動詞、形容詞、副詞の4品詞でおこなわれており、分類はおおよそ正しくおこなわれている(一部、機能によって名詞が副詞に分類される)。名詞は、さらに、場所・天候・方位22語、時10語、動物50語、植物33語、人体34語、服装18語、食物34語、住居21語、族制・社会生活24語、娯楽・遊戯10語、農山村26語、信仰8語に分類される。なお、動詞は56語、形容詞38語、副詞18語である。また、挨拶表現は、固定した挨拶だけでなく、このような場面でどのような声を掛けるかという広い意味の表現を拾っている。
- 『久瀬村誌』(昭和48年=1973年)
「第六章 村の民俗, 第七節 方言」に、関東、関西、名古屋、北陸系や江州系など、系統別に分析された特徴を記述。「残っている方言」は、「挨拶」「星の方言」「獣」「鳥」「魚」「その他の動物の方言」「草」「樹木」「器具や物品」「住居」「食品」「身体」「服装」「人・生活・そのほか」という意味的な分類に続いて、「動詞」「形容詞」「副詞」のように品詞での分類が見られ、一貫していない。また、記述も、「獣」以降は、おおよそ項目に注釈を添える形で示されているが、「挨拶」と「星の方言」はエッセイ風に書かれている点も不統一である。ただし、形式が不統一であるからといって内容的に劣るわけではない。村に特徴的な語彙をきちんと拾っていることは特記に値するし、「しおはえい(塩からい)」など、北陸など西日本に点在する特徴的な語彙を採録する点などは貴重である。
- 『藤橋村史 下巻』藤橋村史編集委員会編(昭和57年=1982年)
「第三章 村の民俗, 第八節 方言」に、概説に続き、語彙を挙げる。語彙は、杉原地区と横山地区のいずれで使われるかを示し、自然30語、動物53語、人代名詞28語、服装20語、身体24語、住居23語、生活98語、時制16語、食品34語、生活生産器具74語、その他423語をそれぞれ五十音順に採録。生活生産器具など民俗学的にも貴重な語彙を多く収録する点でも価値がある。
- 『坂内村誌 民俗編』坂内村教育委員会編(昭和63年=1988年)
「坂内の地域語」と題された『坂内村誌』の記述は、市町村史の中では異色で、まるで小論集で

ある。

最初に収められている「坂内方言集」は、村内の昭和一桁生まれの方が採取された語彙を、当時静岡女子大の学生であった田中ひろ子さんが、原稿に仕上げたものである。分類は、「体言」(334項目)、「用言・副詞」(321項目)、「その他」と大ざっぱであるが、「その他」は、さらに、「人称代名詞」「指示語」「文末助詞」「助動詞」「その他・語法」「挨拶の言葉など」「音便」「アクセント」と分かれる。「その他」については、分類として別にやりようがあったかもしれないが、貴重な語彙を収めていることに加え、文法事項についても、サ行イ音便の存在のほか、カ行五段活用がイ音便ではなく促音便になることなど、方言記述としてこの上なく貴重な記述を含んでいる。

また、この「その他」以降、段組が2段になっており、下部には、この部の執筆者である松岡浩一氏の小論7編を収める。題材は、山口幸洋氏の「アバヨ」の語源説に寄せて、独自の説を展開しつつ、「あばよ」に対し聞き手が「しなよ」と応じることなども付け加えて論じていたり、山田達也氏の調査に寄せて「ものめの「め」」という小論を展開し詳細な対応表をこしらえ補強したりで、随筆風でもあるが、詳細な調査も含んでおり貴重な記述である。ほかにも、村内の地域差、「ヤバル(はびこる)」「サイメン(山野田畑の境界)」など、いくつもの語の語源説に言及する。

「坂内方言集」の後半では、神谷志東という復員後坂内小学校元教員となりわずか2年あまりで夭逝した人物の「川上方言集」を活字化して郷土の貴重な研究に日の目を浴びさせることもおこなっている。この語彙集は、「標準語」を五十音順に並べ、そこに「方言」を対応させるという方法で簡単に記されているものである。

また、第2節「方言区画から見た坂内」では、特にアクセントの面から見た方言区分について詳細に論じている。そこでは、同村出身の国語学者・国語教育学者の日下部重太郎氏(1876-1938)の先見的な考察を紹介することから始まり、詳細な実地調査により、東西アクセント区分の接点として興味深いこの地のアクセントの特徴を詳細に記述した上で、坂内村の方言の岐阜県内、また日本全国に於ける位置付けをも26頁にわたって論じている。

70頁にも及ぶこのような記述は、まさに一冊の研究書と呼べるほどの内容と分量となっている。

- 『徳山村史』徳山村史編集委員会編(昭和48年=1973年)[昭和62年藤橋村に編入]
「第五章 徳山村の習俗、第六節 方言」に、「自然(39項目：以下同じ)」「時制(5)」「動物(50)」「植物(17)」「身体(15)」「人間関係(32)」「遊び・休日(18)」「衣類(9)」「食事(30)」「居住(26)」「生産・生活用品(24)」「仕事(39)」「動詞を中心として(58)」「形容詞を中心として(80)」「あいさつ(6)」の448項目が、村内の8地区のおおまかな分布とともに示されている。「自然」の中に見られる「焼き畑をした後、特定の家の専有権を認められた土地」を「ムツシ」というなど、きわめて興味深い語彙も多数収録されている。また、「待遇表現」として、「この地域の待遇表現は、昔から敬語がなかったといわれている」と貴重な証言も含まれている。さらに、「語法文例」として、共通語の143例文を、下開田、戸入、門入の3地点の表現で対照して示しているなど、文法を知る上でも貴重な資料となっている。

本節は、岐阜大学教育学部から1969年に出版された『郷土資料(1) 揖斐郡徳山村方言』をふまえて「語法文例」の増補ならびに語彙の厳選がおこなわれたものである。同資料は、当時同学部助教授であった奥村三雄氏が徳山方言話者である大牧富士夫氏の協力を得て編集されたものと、「跋」にある。

安八郡(墨俣町は、平成18年大垣市に編入)

- 『安八町史』(昭和50年=1975年)

「第五節 言葉づかい」として、挨拶、人を呼ぶときの「～さ」などが、12行綴られる。高木秀之氏執筆。

- 『名森村史』(昭和30年=1955年) [昭和30年安八町に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『輪之内町史』(昭和56年=1981年)
「第三章 伝承・民俗知識 第六編 民俗 第三節 方言」の中に、五十音順で方言467語について「語意」が示されている。
- 『墨俣町史』墨俣町史編纂委員会編(昭和31年=1956年) [平成18年大垣市に編入]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『神戸町史 上, 下』(昭和44年=1969年)
方言に関するまとまった記述は見られない。

不破郡

- 『不破郡史 下』不破郡教育会発行(昭和2年=1927年)
「第九篇 民俗雑録」に「俗信」「俗占」「食ひ合せ」「俗間療法」「手鞠歌」「子守歌」「遊技歌」「臼挽歌」「伊勢音頭」「雨乞歌附返礼歌」と節が見られるが、特に方言としてはまとめられていない。ただし、「俗間療法」として「めんぼ(麦粒腫)」「アセボ(汗疹)」など、方言が少し見られる。
- 『垂井町史 通史編』垂井町史編さん委員会編(昭和44年=1969年)
「第二章 伝説・民謡・方言・俗信, 第三節 方言」に、五十音順(語頭音以外は順不同)に「方言」と「標準語又は意義」を対照する形で、345項目を挙げる。
- 『新修垂井町史 通史編』(平成8年=1996年)
方言に関するまとまった記述は見られないが、民俗編には、田植えの際の「おこびる」という午後の休憩や、後ろに下がっていく田植え方法「ひっきり田」などの記述が見られる。また、「第八節 人の一生, 四 子供の生活」には、「メンコ」についても、岩手府中で「パンキ」、垂井で「パンパン」「メンコ」、宮代で「メンコ」、表佐で「シュッパン」と呼んだことなどが記されている。
- 『関ヶ原町史 通史編別巻』(平成4年=1992年)
「七 方言」として「1 方言集」と「2 関ヶ原方言の会話文例」を含む。「方言集」には、関ヶ原方言が「近江ことば」の影響を受けているなどの前書きに続き、「方言語形」と「共通語形または意義用法など」とを対照する形で、626項目を五十音順で挙げる。「共通語形または意義用法など」には、たとえば「あこなる(あかなる, あこーなる)」については「ウ音便形をとり、時には「あかなる」のようにア段音になり、ク活型では短音化することも」など解説が詳しくつく。「関ヶ原方言の会話文例」は、丁寧、尊敬など、文末表現を集めたもので、談話ではない。執筆担当者は、元滋賀文教短大講師の高瀬徳雄氏・元滋賀県立高校教諭の高瀬八重子氏であるが、高木孝之氏、米山英一氏などから教示を得た旨、書かれている。
- 『府中村誌』府中尋常高等小学校編(昭和9年=1934年) [昭和29年合併し垂井町]
「Ⅱ 人と習俗, 二 習俗, リ 方言訛言」に、304項目を五十音順(語頭音以外は順不同)で「方言訛言」と「標準語」を対照する形で収録する。少ない項目の中に、「おつけ」で「下さい」、「おきなはい」で「おきなさい」、「さいが」で「と」など、文法的な形式が多く見られる。

海津郡(現 海津市)

- 『海津町史』(昭和47年=1972年)

「第一三章 方言・訛言」として、自称・他称など呼び名29語、物90語、場所12語、動作2語、下図2語、方位5語、時13語、身体33語、動作4語、形容27語、禁止4表現、否定5表現、願望4表現、その他9表現を載録。また、「大正六年ころ草稿された高須町誌がある。高須尋常高等小学校の用紙で複写されているので公刊はされていないが、その中に方言・訛言調査表が載っている。ここでは同書から抜書して引用し、整理して掲げることとした。」とある。『高須町誌』については、やはり刊行されていないようであるが、手書きによる郡内各小学校の方言記述は岐阜県図書館に所蔵されている（前稿既述）。

- 『南濃町史 通史編』（昭和57年＝1982年）
「第六部 民俗 第八章 方言」として、接辞や成句を含む1087項目を五十音順に「方言」と「標準語」を対照して並べる。助動詞・補助動詞ならびに終助詞は適当な動詞と組み合わせて示してあり、該当する表現の有無が知りたいときには不向きである。
- 『平田町史 下巻』（昭和39年＝1964年）
「Ⅲ 民俗 第十一章 雑纂」に「方言」と「語意」の対照として、語句を五十音順に1112項目を収録。接続助詞「とさいが」は「ゆくとさいが」として、尊敬の助動詞「～っせる」は、「いわっせる」として、任意の動詞と共に記載されて立項されているが、伝聞の「げな」や終助詞「えも」などは独立した項目となっている。

養老郡（上石津町は平成18年に大垣市に編入）

- 『養老郡志』岐阜県地方改良教会養老郡支会篇（大正14年＝1925年）
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『養老町史 通史編 下巻』（昭和53年＝1978年）
「第四章 近現代、第六節 民俗」に、「方言」と「標準語」を対照する形で、五十音順に1130項目を収める。記述は簡単ながら、勧誘の形式に「あすぼっけえ」「あそぼまいか」など複数の形式が拾われており、また、尊敬語の「いかした」が「いかった」という形も併記されているなど、語の変化を見る上でも重要な証拠を呈している。ただ、もちろん、複数の形式がある場合、その使い分けが記述されていれはなおよいことは言うまでもない。また、語彙の後には、「会話例」が1頁ほど収められている。
- 『高田町誌』高田町青年団編（大正12年＝1923年）[昭和29年合併し養老町]
方言に関するまとまった記述は見られない。
- 『上石津町史 通史編』（昭和54年＝1979年）
「第三章 近・現代の発展、第七節 社寺と文化、(6)方言」に、語彙を中心に8頁分ほどの記述を見る。概説では、「江州訛」の影響や時山・西山地区の特異性にも触れられており、特に時山方言については語彙の中に注記として示されている。語彙は、354項目が採録されており、特に、時山地区の方言では、「キライル（見えた）」、「デンボロ（かたつむり）」、「モンデクル（戻ってくる）」、「ワサイル（来る）」など、特有の語も少なから見られ、貴重な記述となっている。「日常の会話」は、これもまた時山地方の方言である。上石津の中心部とこの時山地方の差がどれほどあるかは、ここに記されていないため不明であるが、町外の読者に対しては、まず、上石津の代表的な方言会話が示され、その上で時山地方に独特の会話が示されるとよいと思われる。
- 『新修 上石津町史』新修上石津町史編集委員会編（平成16年＝2004年）
「第2節 民俗、第4章 宗教と民俗、三 方言」に、「方言の区別」「郷土における特徴的な語法」「時山地区に残る上方訛り」「上石津町の方言・語彙集」が記述される。語彙は、五十音順に1370項目を「方言・訛言」と「共通語訳」を対照する形で示す。編集委員長は辻下榮一氏。辻下氏は、『ふる里のことば 上石津の方言』という単著も1997年に著している。

- 『時村史 下』中西淳一編（昭和6年=1931年）[昭和30年合併し上石津町]
方言に関するまとまった記述は見られない。

6. 岐阜県市郡町村史における方言記述の特徴

以上、2節から5節まで見てきた市郡町村史の特徴を次に考察する。

今回は、195の市郡町村史を調査した。そのうち、方言の記述がなんらか見られたものは、半数強の101編でしかない（ただし、すでに述べたように、独立した冊子として編まれている地域も多い）。

ここでは、この101編の方言記述を含む市郡町村史から特徴を描き出していく。

6.1 並び順

方言に限らず語彙集を編纂するとき、どのような順で並べるかは、ときに人を悩ませる。

岐阜県の方言集については、意味分類別は少数派で15編、方言記述が見られた中でもおおよそ7編に1編しかない。意味分類別は、大野郡と揖斐郡に集中している。この2郡は、いずれも県境に位置し、そのせいもあってか、県内でも方言記述が多い地域である。また、9編が品詞別で、昭和5年の大垣市史を参照したのか、大垣市史青墓編、揖斐郡池田町史、春日村史と西濃に多く見られる。

大半は語頭音によって分類されたもので、それは、五十音順とイロハ順に分かれる。イロハ順は、大正時代の2編に見られるほか、昭和33年の江吉良郷土史と昭和57年の八百津町史に見られる。一方の五十音順は、近年編まれるものの主流となっているが、大正時代から戦前には、語頭音のみの分類で、第二音からは順不同というものも多く見られた。すべて現代の辞書のように五十音順に並べたものは大正時代の郡史にもあるが、戦前、すべて五十音順というのはむしろ少数派であった。

並び順については、意味分類別と品詞別は地域的な偏りが見られ、一方、イロハ順と語頭音以外が順不同である五十音順は、古い時代に偏りが見られるという結果となった。

6.2 記述内容

ほとんどの市郡町村史の方言記述は、語彙のみである。

共通語と語としては共通するが音が変化している、いわゆる「訛」と、方言独自に見られる「俚言」は、混在する形で並べられるのがふつうであり、今回の資料においても、音韻的な特徴を記した郡上八幡町史など一部の資料も含め、訛と俚言は混在して見られた。

語彙以外の記述にまで踏み込んだものは少ない。今回調べた限りにおいて、前書きの他にまとまった音韻的な記述が見られたのは、上矢作町史、郡上八幡町史、白鳥町史、美並村史、可児町史、坂内村史など、一桁であった。また、文法の記述が見られたのも、上矢作町史、郡上八幡町史、美並村史、可児町史、坂内村史、河合郷土史と新修関市史などに限られた。

6.3 執筆者・編纂者

今回、大学の研究者が関わったと見られたものは、上矢作町史、明智町史、御嵩町史、関ヶ原町史など少数であった。しかし、大学の研究者だけが立派な記述をできるとはかぎらない。むしろ、方言という身近なことばは、地元に関心と能力をもった人がいることが重要であることは言うまでもない。

気になることとしては、当該箇所の執筆者がわからない市町村史が多いことがある。郡史のような古い時期であればともかく、現代において、だれが執筆したかは当然書かれるべき情報である。その記述は、責任を明確にする一方、労苦に報いるものとなる。また、南濃町史と養老町史、宮村史と荘川村史のように、似ている記述内容がある場合に、執筆者が明記してなければいらいぬ疑念も抱かれる可能性がある。方言記述であれ他の分野の記述であれ、必須となる情報である。

なお、編纂者については、明治・大正期から昭和初期に掛けて、教育会と呼ばれる組織も多く見ら

れた。教育会は、今でいう教育委員会のような役割をしていたのであろう。大正4年の丹生川村史から昭和13年の笠置村史まで、教育会の手による市郡町村史は7編ある。また、前稿山田(2010)で紹介した、岐阜県内でもっとも古い方言集である『養老方言集』(明治35年=1902)なども、教育会が編纂している。教育会は、(方言収集の目的がどうであれ)県内の方言記述に大きな役割を果たした。

6.4 方言矯正意識

方言は何のために記述されるのか。その意識はさまざまである。

教育のための方言の捉え方は、古くはもっぱら「矯正」のための資料であった。この「矯正」という意識は、明治時代の国語調査会による方言調査以来、随所に垣間見られるものである。方言の記述に「正しいことば」「正言」などの用語を用いているものは、大正4年(1915年)の河合村史以来9編あるが、その他にも、前書き等に方言を「標準語」に対し劣ったものと捉える記述が見られるのも、大正12年の本巣郡史ほか、少なくない。平成10年の改訂まで、文部省(当時)の学習指導要領に「なまり」の矯正という考え方が見られ、方言は直すべきものと捉えていたことから考えれば致し方ないことかもしれない。

7. 市郡町村史における方言記述の発展性

市郡町村史は、時代を超えて読まれ活用されるものであるからこそ、内容や記述方法は考えられるべきであろう。望まれる市郡町村史の姿とはどのようなものであろうか。今少し述べておきたい。

7.1 内容

今回調査した半数弱の市郡町村史には、方言に関するまとまった記述が見られなかった。ことばは、当たり前前に存在する空気のような存在であるからこそ、時代が変わったときに貴重な資料となる。

50年後、100年後に求められる記述とは、どのようなものであろうか。たとえば、御高町史のように、使用頻度や年代などが記号でおおまかに記されていることも参考になる。新修関市史のような、域内の差を描いた方言地図は、これからの変化の動態を描くためにも継続的におこなわれるべきである。方言記述は、歴史記述のような過去の積み重ねではなく、未来に積み重ねていくものである。

語彙は、総体を記したものが少ない。俚言、すなわち、地域独特のことばは貴重であるが、その関連語彙についての情報も求められる。たとえば、郡上八幡町史は参考になるであろう。

語彙に比して記述されることが少ない文法や音声の記述も求められる。文法は、伝統的な国語学の手法では限界もある。たとえば、岐阜県では持続を表す「～よる」など、助動詞と考えるなどの工夫を要する。共通語の文法に縛られる必要はない。日本語のような膠着語は、動詞に助動詞や接辞が付加されて複雑な述部を形成するが、それらは動詞の活用語尾(いわゆる、未然形、連用形など)に付される。そのため、共通語であっても、五段動詞と一段動詞、さらにはサ変・カ変と分類して記述しなければならず、一定程度の分析力が必要となる。方言ではさらに独自の音変化も加わり、また、慣習上特殊な変化をする場合もあり、正確な記述には、やはり専門的な知識を必要とする。

文法と堅苦しく考えるのが難しければ、神岡町史のように、用例を豊富に挙げておくだけでも後世に有用となる。用例は、実際に発音されたものがあればなおよい。これからは、CDなどで会話を保存しておくことも求められていくであろう(今回、村史としては挙げられなかったが、旧益田郡馬瀬村には、3巻からなる談話集がある。音声も保存されていると聞いている。今後活用される方向で検討がなされることを期待する)。また、CD-ROMなどで刊行されることも期待される。

7.2 協同

歴史の記述に関しては、大学等の研究者も多く関わっていると聞く。もちろん、ことばをはじめ、

その地域に関することはその地元の人が記述すべきものである。坂内村史の松岡浩一氏など、すばらしい記述を遺された地域の識者もある。また、地元の研究者によって記述がなされた神岡町史をはじめ、収録語彙の多い記述レベルの高いものもある。

しかし、今回、研究者が関与した上矢作町史や明智町史などには、客観的に見て優位な点が多く認められる。御嵩町史などは、地元の研究者との協同によってなったのであろう。関ヶ原町史も記述内容が深い。その地域で唯一の、そして深い記述がなされる場となる市町村史である。地元のことは地元で記述したという思いを尊重しつつ、よりよいものにするためには、その地に縁のある研究者との協同が、方言の分野についてもより求められていくであろう。

8. おわりに

知識という財産は、長きに渡って受け継がれ、伏流しようとも、いつか個人の人生を、そして地域を潤す。その泉となるのが大学での学習・研究である。いくら立派なつるべを設えようと浅い掘削であればすぐ枯渇してしまう、そんな井戸ではいけない。そう思って日々教育がなされるべき大学が、今、目先の教育に汲々としている。各地域で核となるべき「先生」を育てるのであれば、生涯役に立つレベルの教育（座学）を厭うべきでない。今こそ、何年にもわたってきちんと実りをもたらす慈雨を、大学教育において降らせ続けなければならない。そのことによって、より長期的視野を持ち地域の宝を大切にできるような教育が実現していくであろう。

100年に及ぶ市郡町村史を振り返り、次の100年に役立つ研究と教育をしなければならないと、改めて自戒の念を抱きつつ、今、思う。

【付記】

2010年暮『神岡町史』方言の記述を担当された甲谷良治氏の訃報に接した。氏には、富山在任中から調査にご協力いただき大きな恩に預かった。ご冥福をお祈りいたします。

【参考文献】（本文中に引用した市郡町村史は除く）

- 奥村三雄編 (1976)『岐阜県方言の研究』大衆書房
- 菊沢季生 (1989)『菊沢季生国語学論集 第五巻』教育出版センター
- 杉崎好洋・植川千代 (2002)『美濃大垣方言辞典』美濃民俗文化の会
- 土田吉左衛門 (1959)『飛騨のことば』濃飛民俗の会
- 山田敏弘 (2010)「岐阜県における方言研究・記述の歴史」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』58-2
- 『角川日本地名大辞典21岐阜県』(1980) 角川書店